

卒業する皆さんへ  
～平成三十年度卒業証書授与式校長式辞より～

ただ今、卒業証書を授与しました270名の生徒の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんは、「郷土に思いをいたし、こころ豊かでたくましく生きぬく実践力のある人材を育成する」という本校の教育目標のもと、三年間努力を重ねてきました。その努力に敬意を表すとともに心から拍手を送ります。

集大成となる今年度は、県総体での2年連続総合優勝をはじめ各種部活動の全国大会出場などがありました。また本校の創立120周年記念式典や本校を会場に行われた体育科・コースの全国研究大会においては、準備から当日の運営まで誠意をもって協力してくれました。当日の挨拶や接待・見送りなどにおける社高校生らしい心配りは、来場された方々から多くのお褒めの言葉をいただきました。また、今年は、本校初の出雲ドームでの体育祭を企画しましたが、当日は台風のため開催できず2日後に本校グラウンドでの開催となりました。そのため、デコレーションも応援席に飾ることもできず体育祭を実施しましたが、不満をもらすこともなく円滑にかつ和やかに運営してくれました。当日、本校正面玄関の上に校舎壁面を利用して飾った4枚のデコレーションは、それを象徴するかのよう輝きを放つすばらしい出来映えだったのを覚えています。

さて、皆さんは本日から新たな社会に一步を踏み出します。そこにはどんな特徴があるのでしょうか。

まず1つ目は人工知能が至る所で活躍する社会です。人間の社会は、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会と進展し、今は、第5番目の社会に入ろうとしているところです。つまり人類史上の大転換点にあるわけです。第5の社会とは、人と物がインターネット等を通しつながっている社会です。第4の社会である情報社会では、人が情報を収集し判断しものを操作することが必要ですが、第5の社会では人工知能により情報が自動的に収集・分析され、サービスなどが提供される社会です。車の自動運転はもちろんのこと、冷蔵庫の食材を感知してドアの壁面に献立が提案される、ビルの建設現場ではロボットが自分で考え働くことなどが予想されます。家から一步出て空を見上げると、トンボならぬ宅配用ドローンが目的の家を探しながら上空を飛び交っているかも知れません。

2つ目の特徴は、グローバル化や多様性です。グローバル化といえば、何となく英語ができて海外で活躍することを想像しますが、これからは私たちが住む地域のグローバル化を考える必要もあります。出雲市でも外国人住民の数は、今年の1月31日現在で4798人です。約5年前の3月は1969人ですから5年間で約2800人増加したということです。今後も増えることが予想されますし、職場の同僚として働く機会も増えてくると思います。

このような変化と多様性に象徴される社会で重要視されるのは、集約すると「切り拓く力」と「受けとめる力」だと思います。2つの関係は刀とそれを収める鞘（さや）のようなものです。

まず「切り拓く力」について。これは、「提案し実践する力」といっても良いと思います。解決策を見だし実践できることです。変化の激しい社会では、誰もが正解を知らない課題が生じます。人が考えたことを批判するのは、いかにも賢く見えますが簡単です。賢い批判者で終わるのではなく、誰もが困っているときに知恵を絞り出し「だったらこうしてみたら」と提案できる人になってください。批判されても、これでもかと考えを創り

出す粘り強さやたくましさを持ってください。これからの社会はそういう人こそ必要としています。そのためには、与えられたことを「学び、行い、よし」とするのではなく、常に新たに学び続け、自分自身の考えが発信できるようにしておく必要があります。つまり未来を切り拓くための刀を研いでおかなければなりません。

次に「受けとめる力」について。抜き身の刀、しかも鋭い刀は危なっかしいですし、他人だけでなく下手すると自分自身を傷つけてしまうこともあります。刀を持ち歩くにも刀を収める鞘が必要です。「七人の侍」「赤ひげ」「生きる」など1950年代60年代に数々の名作を創ったのは黒沢明監督です。彼の作品は若いうちに一回は見てほしいと思いますが、その中に「椿三十郎」という映画があります。腐敗した藩を立て直そうと立ち上がった若侍を助ける浪人が椿三十郎で、剣の達人です。敵方から救出した家老の奥方から次のように言われます。「あなたは少しギラギラし過ぎています。刀の抜き身みたいに。本当によい刀は鞘に収まっているものですよ。」「本当によい刀は鞘に収まっているものですよ。」は、この映画では有名なフレーズです。

優れた技能や知性に対し、自分にはないもの、新しい考え方、異質なものを受け入れる力が必要です。切り捨てるのではなく一旦は受け入れるのです。謙虚さ、寛容性といっても良いかも知れません。国籍の違いのみならず多様な人と共生していくには、お互い尊重し支え合うことを前提にコミュニケーションをとらなくてはなりません。「受けとめる力」は、感受性や人間性、人権意識に深く関わる部分です。若いうちに様々な人や考え方、芸術・文化に積極的にふれ自分の受容力を高めておくことが大事です。自分の器を拓げ、こころ豊かな人生の地ならしをしてほしいと思います。「切り拓く力」と「受けとめる力」を身につけ「この人と一緒に働きたいと思われる人」になってほしいと願います。

皆さんは、4月からふるさとに残る人、離れる人など様々でしょうが、どこにいても「ふるさと」は常に心の拠り所となります。そして私たちは、ふるさとから応援しています。一方で、皆さんの若い力と笑顔でふるさとを照らしてほしいのは、ふるさとで生きる私たちの思いです。一旦ふるさとを離れる人も、いつでも帰ってきてほしいと思います。

今、皆さんはタンポポの種のように綿毛を風にのせ、飛び立とうとしています。それぞれの降り立ったフィールドで、それぞれの環境を生かしながら種を根付かせ、それぞれの新しい花を咲かせてほしいと願っています。

終わりになりますが、ご多用の中ご臨席を賜りましたご来賓の方々に、今までのご支援を厚く御礼申し上げます。そして、保護者の皆様、本日は誠におめでとうございませう。皆様のこれまでの御労苦に対し、深く敬意を表しますとともに、本校の教育活動にご理解とご協力をいただきましたことに対して、改めて感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、皆さんが粘り強く実り多き人生を送られることを祈念して、最後のエールを贈り式辞といたします。

「困ったときがチャンスです。」

平成三十一年三月一日

島根県立大社高等学校  
校長 吉田 彰 二